

## 献体登録による認識の変化についての一考察

——「くまもと白菊会」会員のインタビュー調査より——

赤星 誠\*<sup>1</sup> 中島 香織\*<sup>1</sup> 川元 裕子\*<sup>2</sup> 児玉 公道\*<sup>3</sup>

### 【抄 録】

熊本大学医学部の中に事務局を置く「くまもと白菊会」に、平成13年度に献体登録者として新規登録した52名の会員の中から10名を選び、その人達にインタビューを行った。インタビューは半構成的面接法を用い、年齢、職業、家族背景、宗教の有無、献体登録の動機、家族の許可を得るための働きかけの仕方、死にたいする思い、献体登録の動機、献体登録前後の心境の変化、人生の生きがい、目標にするもの等を中心に、自由に話してもらった。その内容をエピソードごとにまとめたところ49のグループに分けられた。それらの共通性、相違性に着目して抽象化し質的に分析していった結果、最終的に献体登録者の登録に際しての認識の変化について以下の2つの内容が明らかになった。

- 1) 死の恐怖感がなく、死後の自分の葬儀についても具体的なプランを生前よりもっており、また死後のボディイメージを認識しているという死生観の成立がみられ、また心のおちつきと、安心感が認識できているというように心の安定が得られている。
- 2) 自分の力で生きていく力があり、死ぬまでは元気な身体でというように積極的な自力による生の意志がみられ、また恩返しという認識があり、自分以外の他人のために生きていくというボランティア精神にあふれている。

【キーワード】 献体、死生観、認識、メンタルヘルス、ボランティア

### I 序論

#### 1. はじめに

先に献体登録者の精神保健行動を明らかにする目的から財団法人日本篤志献体協会が発行している文集「私と献体」の第12集から第17集の6冊に掲載されている献体登録者の手記を分析し、その結果<sup>1)</sup>を発表した。この研究では、献体登録後の認識の変化、献体登録の動機、死生観、生きがい・目標の4つの項目について登録者からのデータが得られた。しかし、これらのデータは登録者の手記からの分析であり、主に、献体に至った動機について書かれた物であった。このように限られた範囲の中でのデータ源であったので、献体登録者の深層に迫るには不十分であることが分析の限界として認識された。

これまで、献体に関する研究としては、星野らに

よる研究<sup>2)</sup>があり、千人規模のアンケート調査を行っている。しかし、被調査者は登録した人ではなく、一般人の献体に対する認識を調査したものである。献体登録者みずからの認識を探る調査研究はみあたらない。そこで、実際に登録者に面接を行い、その人達の献体に対する認識からその意味を考察し、先の研究結果1)~4)<sup>3)</sup>と比較検討する調査を思い至った。星野は「献体登録を済ませた人たちがよく言うことであり、私自身も同じような経験をしたのであるが、献体登録をすると、何かしらほっとした気持ちになるのである。自分は死んでも役立ててもらえるのだ、と思うことによって、献体登録者は、いつお迎えが来てもいい、学生さんたちが待っていてくれるのだから、と思うようになったということを知ることが多い。」<sup>4)</sup>と述べている。このような発言は、先の研究結果でもみられたが、精神的安定感に支え

\*1 Makoto Akahoshi, Kaori Nakashima : 宮崎県立看護大学

\*2 Yuko Kawamoto : 県立宮崎病院

\*3 Koudou Kodama : 熊本大学

られた独特の死生観を語っていると考えることができる。

ここでは、実際に献体登録者に面接を行い、得られた結果と先の研究結果との比較検討を行って献体登録の意味について考えてみたい。

## 2. 研究目的

献体登録者の登録に際しての認識に焦点を当て、先の研究結果と比較検討する中で、登録することによる認識の変化について考察する。

## 3. 主な用語の定義

献体登録者：医科大学・歯科大学における人体解剖学実習の教材として、自分の遺体を無条件・無報酬で提供するために、生前より献体登録団体に申し出て、名前を登録している人。

死生観：その人の人生において、死をどのように捉え位置付けているか、また同時にその人がどのように自分の生をまっとうしようとしているかという考え。

メンタルヘルス：心の安寧状態を保ちながら生きること。

健康：人間がその生活過程においてもてる力を最大限に活用し得ている状態<sup>5)</sup>。

認識：人間の体に備わっている五感器官を通して得られた感覚が、脳細胞で合成されることによって創られた像<sup>6)</sup>。

## II 対象と方法

### 1. 研究対象

熊本大学医学部の中に事務局を置く「くまもと白菊会」の会員の中で、平成13年度に新規登録された52名の中から選んだ10名。尚、この中で、医療施設に病気療養中の人は事務局のスタッフより情報を得て、前もって5名を除外した。

### 2. 研究方法

#### 1) 研究対象者選定までの手続き

対象者選定にあたり、「くまもと白菊会」事務局の担当スタッフおよび会長に面談し、本研究の趣旨を説明することで調査開始の了解を得た。

平成13年度に「くまもと白菊会」に入会した会員52名の名簿を取得し、この中から病気療養中の5名を除いた47名を調査対象とした。この中からさらに15名を無作為に抽出し、最終的な調査対象者として選定した。これらの対象者へ研究の趣旨を説明した用紙、および返信用葉書を同封して郵送によりインタビューへの協力を求めた。この中で10名より、インタビューに応じる旨の返答があり、日時と場所を調整した上で調査に入った。

#### 2) 調査期間と情報収集の場所

調査期間は平成14年度2月より3月までで、調査対象者の住居および近くの公的施設、レストラン、ホテルのロビー等でインタビューを行った。

#### 3) インタビューの内容と方法

インタビューは、先に行った研究結果を参考にして、インタビューガイドを作成し、半構成的面接法を用いた。これらの内容は、年齢、職業、家族背景、宗教の有無、献体登録の動機、家族の許可を得るための働きかけの仕方、死に対する思い、献体登録前後の心境の変化、人生の生きがい、目標とするもの等の質問項目になっており、本人にその質問項目に基づき自由に話してもらった。インタビューに要した時間は、1時間程度を要した。

インタビューはメモをとりながら行ったが、あらかじめ、本人からテープレコーダーへの録音の許可をもらってインタビュー内容を録音した。これら録音物やメモ類は、調査終了後に、全て焼却処理することと、個人名はださないことを確約した。また、インタビューを行う者も献体登録者である旨をあらかじめ告げておき、10名の対象者には、その登録者が全て単独で行った。インタビューを行った対象の状況は表1に示す。

#### 4) 分析方法

録音したテープからメモを参考にしながら忠実に文章化した。分析は記述した文章の中から、研究対象者の献体に関して自分の意見がエピソードとして述べられている箇所に下線を引いていった。その下線の中で最もエピソードの中身を示していると思われる部分を名刺大のおおきさのカードに

書き移していった。これらのカードを以下の要領で抽象化を進めていった。

(1) そのカードをランダムに広げ、繰り返し読ん

だ上で似かよった意味を持つカードを集めて、そのカードのグループを代表するような名称をつけていった。

表 1 調査対象

番号	性別	年齢	職業(引退前)	献体登録にいたったきっかけ(動機)
1	女性	57	ホームヘルパー	新聞記事で献体に関する記事を読んで
2	男性	77	大学教官	医学部の教官からすすめられた
3	女性	54	販売業	老人ホームの待合室で白菊会の本を読んで
4	女性	44	美容関係	死後を有効に使いたい。誰かのために
5	男性	65	営業	知り合いが献体登録していた。親戚が医師
6	女性	58	営業	死んだ後も誰かに感謝したかった
7	男性	71	(高校教師)	妻が献体の意志をしめしたので
8	女性	66	専業主婦	友人が献体登録していた
9	女性	43	専業主婦	誰かを助けてあげたいと思った
10	女性	38	会社事務	夫の死後の火葬された骨を見て

表 2 インタビューの場面

「すごいですね。そういう切り替えはね」〈生きていけるって可能性があるんならば、そっちの方へ賭けなきゃいけない。努力はしなきゃいけないね。〉「なるほど」〈死ぬっていう、癌が末期であればね、自分で、多分私は、その当時わかりませんが、今だったら多分ホスピスに行くと思います。〉「入院なさった病院ではどうだったですかね。回りの患者さんも含めて、その治療の在り方っていうのは。」〈そこはですね、婦人科と産科が同じ棟にあったんですよ。真ん中のナースステーションをはさんで。だから、おめでたと死ぬ人と同じ病棟だったから。〉「それは、つらいですね」〈でも、私はね、産科の患者と間違われましたね。よく。やたらめったらニコニコしていましたね。元気だったんですよ。初期だったんですからね。だから盲腸の手術みたいなものでしたからね。〉「それから、もう8年も経っておられるんで、そういう方がだいたい長生きされるんですよね。」〈らしいですね。献体ができるようにね、例えば、頑張って元気にならなければって思いますね。そういう意識は変りましたね。〉「要するに、自分の身体を大事にしていくっていう。」〈そうそう。自分の身体だけど皆の実験台になるわけだから。あまり粗末に扱おうと失礼かなって思いますしね。だから預りもんかなって思いますしね。〉「あ、そうですか。そういった意味では献体登録してから自分の健康を少し、やっぱり意識されることが」〈考えましたよ。それはそれは。〉「その変わられたってお話をちょっと、ついでにして頂きたいんですけど、一つは自分の健康についての考えが変わられたってことでしょうかねえ」〈特別、これと言ってはないですね。ただ、①死ぬまで元気でいたいっていう気持ちは強くなりましたね。でね、あまりみっともない体型にはなりたくない。〉「みっともない体型、例えば」〈おデブになりたくないとかね。実験台のベッドに乗らないほど太りたくないとかね。〉「なるほどね」〈そういうのは感じますかね。〉

\*①の下線部をこのインタビュー場面を代表する献体登録者の言動として〈表 3-2〉の2)「元気な身体で生きる」という項目のaに記入した。

\*上記の「 」はインタビューをおこなった者の発言内容であり、〈 〉はインタビューを受けた献体登録者の発言内容である。

- (2) 次のステップとして、その名称をつけたカードの共通性、相違性に着目してグループ分けしていったとまとまりのあるもの同士に名称をつけた。
- (3) 最後に、これらの名称をつけたものをさらに分類した。

### Ⅲ 結果

インタビューの場面の例を〈表2〉に示した。インタビューから導き出されたカードは全部で49枚であった。そのカードの共通性、相違性に着目して抽象化を進めていった結果、9つのグループに分類でき、それらに名称をつけた。この分類を第1段階のまとまりとした。以下にこれらを提示する。

- ① 「死の恐怖感のなさ」
- ② 「死に方、葬儀についての具体的なプランの生前決定」
- ③ 「死後のボディイメージの確認」
- ④ 「心のおちつき」
- ⑤ 「安心感」
- ⑥ 「自力で生きる」
- ⑦ 「元気な身体で生きる」
- ⑧ 「恩返し」
- ⑨ 「役にたつ」

さらに、これらの中で①、②、③の3つのグループをまとめて〈死生観の成立〉と命名した。また、同様にして④、⑤の2つのグループをまとめて〈心の安定〉と命名した。また、⑥、⑦の2つをまとめて、〈自力による積極的な生きる意志〉とした。最後に⑧、⑨の2つをまとめて〈他人のために〉と命名した。これらの分類を第2段階のまとまりとした。以下にこれらを提示する。

- ① 〈死生観の成立〉
- ② 〈心の安定〉
- ③ 〈自力による積極的な生きる意志〉
- ④ 〈他人のために〉

ここでは、さらに上記の①〈死生観の成立〉と②〈心の安定〉の2つをまとめて、1.『死生観の成立とメンタルヘルスの確保』とし、また③〈自力による積極的な生きる意志〉と④〈他人のために〉の2つをまとめて2.『ボランティア精神と積極的な生への意志』とまとめた。これらの分析結果は表3-1、表3-2に示す。

尚、これら表3-1、表3-2の中の右の欄の「献体登録者の発言」は、カードの中の登録者の発言の中で、最もその献体についてのエピソードを語っているのに中心的と思われる発言の例を記入している。

表3-1 分析結果

最終的なまとまり	第2段階のまとまり	第1段階のまとまり	献体登録者の発言
1. 死生観の成立とメンタルヘルスの確保	①死生観の成立	①死の恐怖感のなさ	a. はい、同じですね。あまり恐くはないっていう。 b. 子供は育ててませんし、だから死ぬ事に関しては、別に何もおそれる事はない。 c. あっ、おきれた。生きてたなって感覚で小さい頃から過ごしてきたんで、いつも「死ぬ」ってことは隣りあわせで、恐くない。 d. 覚悟は、いつ、どうなってもできています。
		②死に方、葬儀についての具体的なプランの生前決定	a. いわゆる香典のやりとりとかそういうものは一切お断りしようかな。 b. あんな大きな葬祭場では、大げさな葬式なんかもうしてほしくないんです。もっと本当身内だけでね。送ってくれたらもう。 c. 延命はもうお断りということですね。痛みがあるから痛みをとってもらうくらいでよろしい。

			<p>d. 遺言もちゃんと書いて、息子にもみせました。</p> <p>e. 死後は一応、全部ハガキを出す場所をワープロに打っていますので。</p>
		③死後のボディイメージの確認	<p>a. これではっきり自分の死んでからの方向が決まったっていうなんか納得したというかそういうのはあります。</p> <p>b. 死んで、死んだ時に自分の行き先がはっきり今、認識できる状態を作っておきたい。</p> <p>c. 死んだ後の事考えると、これでけじめが先についたという感じで。</p>
	②心の安定	④心のおちつき	<p>a. なんかね、落ち着きましたもんね。</p> <p>b. 区切りがついて、そういう面に対しての落ち着きみたいなのはあるなということは少しは感じてますね。</p> <p>c. 行き先が決まったので、今はおちついてますね。</p> <p>d. 今はとてもおちついてますよ。</p> <p>e. 変化って別になかったけど、今はおちついてますね。</p> <p>f. なんか、おちついた気持ちになりましてね。</p> <p>g. それ程、質的に変わったということはないですけど少しおちついたような気もします。</p>
		⑤安心感	<p>a. ちゃんとして下さるところがあるんだっていう安心感。</p> <p>b. カードもらった瞬間に「あっ、安心」とおもいましたもん。</p> <p>c. 何か、気持ちの中に柱ができて安心しました。</p> <p>d. 何か、安心して逝けるかなっていう気持ちです。</p> <p>e. ただ、ほっとしたっていう感じですかね。安心しました。</p> <p>f. なんて言ったらいいかうーん、ホッというか、もう登録してた時点でホッとしてたので。</p> <p>g. やっぱり、できてホッとしました。</p> <p>h. だから、もう本当、献体に登録して何かホッとしています。</p>

表 3-2 分析結果

最終的なまとめ	第2段階のまとめ	第1段階のまとめ	献体登録者の発言
2. ボランティア精神と積極的な生への意志	③自力による積極的な生きる意志	⑥自力で生きる	<p>a. 自分のことは自分でしとかんと、もう最終は、できるだけ事を自分ですませたいと思って。</p> <p>b. 自分の始末は自分でしたいっていう考えをもっているんですよ。</p> <p>c. 今はとにかく、誰にも頼らないで一人で、一生懸命生きたいと思うんです。</p>
		⑦元気な身体で生きる	<p>a. 死ぬまで元気でいたいっていう気持ちは強くなりましたね。</p> <p>b. 献体ができるようにね、例えば、頑張って元気にならないといけないって思いますね。そういう意識は変わりました。</p> <p>c. その日その日を、まあ死ぬまではね、一生懸命よく生きたいと思うんです。</p> <p>d. 皆さんに感謝しながら、元気な身体で生きていければなあ。</p> <p>e. 2万とか3万とか自分のためにだけに使っていいものかと思って考えていたのを献体してから、元気な身体のうちに行きたいところに行こう、したい事しようという風におもいました。</p> <p>f. やっぱり人に感謝されて、家族とかに迷惑かけないで元気なうちはしっかり生きていくっていうのがやっぱり目標じゃないかな。</p>
	④他人のために	⑧恩返し	<p>a. 恩返しといますか、医学の進歩に少しでも役にたたいと。まあ、これはささやかな希望ですけどね。</p> <p>b. もし、私がそうやって死んだ時に、そういう形で私が役に立てればそれで何かお返しができるんじゃないかなっていう私自身の考えですけど。</p> <p>c. 死んでからぐらい感謝したほうがいいんじゃないって言って。</p> <p>d. 人様のご遺体を解剖させてもらって、うちからは誰もせんってのはおかしいぞって、みたいなことを言いよってですね、つまり恩返しにもなるかなって思って。</p>
		⑨役にたつ	<p>a. 献体の形をとれば、まあどうせ焼却はされるもんでもその前に少しでも役にたつものであれば。</p> <p>b. とにかくどうせ骨になってしまうのに、なんかのお役にたつたらいいとおもいましてね。</p> <p>c. だからもうほんと究極のボランティアですな、今度はあの献体はね。</p>

			<p>d. なんか少しでもねお役にたったらって思うだけでたいした思いはなんにもございませぬ。</p> <p>e. 私もちゃんと生きていけばもうピンク色の骨で死ぬかもしれないけれど、肉も何かに使ってもらった方がいいかなと思って。</p> <p>f. 人のためになるんじゃない、生きている時のためになったことないかもわからないからね。</p> <p>g. 人に役にたって死にたいという思いが強いですね。</p> <p>h. いいお医者さんのためにもね、私たちの身体であの、勉強してほしいんですよ。これも願いですね。</p> <p>i. 最終的な幕をとじる時にね、何か役に立てるっていうすごくきれいな気持ちになれたんです。</p>
--	--	--	--

#### IV 考察

##### 1. 献体登録者の死生観と精神的安定感

高齢化社会の今、これからの日本はこれら老人の死亡者が増加していく可能性がある。広井は「年間の死亡者が急速に増加する中で『死』という現象が人々にとってある意味でより身近なあるいは日常的なものとなっていくのがこれからの時代のひとつの特徴であろう<sup>7)</sup>」と言っている。このような時代状況を述べる一方、「死の意味がわからず、同時に、生の意味づけがよく見えないという死生観の空洞化<sup>8)</sup>」も強調している。このような現象は、戦後の民主主義教育、平和教育の中で、死生を問うことが軽視されてきたことにも関係があると思われる。今回の献体登録者へのインタビューでは〈表3-1〉に示すように最終的に、一つは『死生観の成立とメンタルヘルスの確保』という形でまとまった。この中で、死生観の成立については、第1段階のまとめりで(1)「死の恐怖感のなさ」という項目が含まれる。これに関しては、先行研究でも、「死を具体的な状況のもとで想像することになれば、死ぬことの怖さがなくなった<sup>9)</sup>」とか「人生に対する迷いがなくなり、死ぬことが怖いといった感情が遠のいた<sup>10)</sup>」というような内容と同じ結果となっている。ここでは献体登録することにより、ある意味で『死への準備』がされるというような心的状況になるのではないかと考えられる。第1段階のまとめりとしては「死に方、葬儀についての具体

的なプランの生前決定」と「死後のボディイメージの確認」というようなまとめりにもなっており、両者を含めて検討しても、『死への準備』ということで死生観の成立へむけての進捗状況がうかがえる。モリスは「完全に充実した生きかたをするための最良の準備は、いつでも死ぬ準備をすることです。」<sup>11)</sup>と述べている。また、池田は日本人の死に方・考の中で「これまでダラダラ生きてきた人間だが、このまま突然死んだら、人生の相当の部分をわからないまま人生を終えるかもしれない。現実的な問題として、死んだときの事を決めておいたほうがいい。」<sup>12)</sup>と語り、死への準備が確固たる死生観の成立に関係していくことを強調している。このような論調は、昨今の学校教育で生きる力を養成するために早い時期からの「死への準備教育」の必要性が強調されている論理と同じ延長線上にあるものと思われる。「死への準備教育」が死生観の成立につながってくるが献体登録者の多くは登録した時点からこのような死生観の成立と向き合うことになるといえる。

また〈表3-1〉の第2段階のまとめりでは、2番目として〈心の安定〉としてまとめた。ここでは、先行研究でも「こころの安らぎが得られた<sup>13)</sup>」という項目が上がったが、今回のインタビューでも、この点に関しては、49のエピソードの中で15が献体登録後の心の安定に関連したものだ。献体登録することで、こころの落ち着きと安心感が得られるということで、ある意味では祈りの中で安心立命の境

地になったり、悟りの中で心身の解脱と安寧の状態になるというように宗教体験に近似したメンタルヘルスの確保がなされているといえる。死後のボディイメージを認識することが死を見つめることにもつながり、死を見つめることで今の生を振り返ることもつながってくる。この連関を登録者は意識的に行うことができやすい状況にあると考えられる。この意識的な行為の中で、死後の遺体の処理に関連して〈定まった自己〉の認識がこころの安定に結びついてくるように思われる。

## 2. ボランティア精神と積極的な生への意志

〈表3-2〉では、第2段階のまとめりとして、〈自力による積極的な生きる意志〉があげられた。先行研究でも、「生きる意欲につながった」<sup>14)</sup>とか「健康に気をつけた余生を送りたい」<sup>15)</sup>、さらに「解剖で使用予定の身体を傷つけないよう事故などに気をつけたい」<sup>16)</sup>という項目があがっている。これらにもみられるように、登録することにより、他人の力を借りないで、なんとか死が訪れる日までは元気な身体を保ちたいというように認識が発展していつている。このように、死がさしせまったものではないが、いつの日かやってくる死の訪れが死後のボディイメージを伴った明確なものとして認識されるとき、その死と同時に生に対する「振り返り」が生ずるものと考えられる。その振り返りの中で積極的な生への意志が生ずるものと思われる。

また同じく第2段階の2では〈他人のために〉という言葉でまとめた。先行研究でも「お世話になった人に感謝したい」<sup>17)</sup>とか「医学や社会のために役にたきたい」<sup>18)</sup>、あるいは「お世話になった医療職の人達の役に立ちたい」<sup>19)</sup>、「親しい人達をあったかく見守っていききたい」<sup>20)</sup>という内容が出ており、〈他人のために〉という項目は、これらの先行研究の結果とも重なってくる。〈表3-2〉では、最終的なまとめりとしてボランティア精神という言葉を使用した。金子は「ボランティアというと『困っている人を助けてあげること』だと思っている人が多いのではないだろうか。ところが、実際にボランティアに楽しさを見いだした人は、ほとんど『助けられているのはむしろ私の方だ』という感想を持つ。」<sup>21)</sup>と述べている。登録者も〈他人のために〉という認識はあ

るのだが、助かっているのは登録者自身であるのかもしれない。形の上では〈他人のため〉に行った行為であるが、そのことによって得られる積極的な生への意志や、死生観の成立やメンタルヘルスの確保というある意味での報酬があるからである。

献体登録者の認識の変化について述べてきたが、ここでみられることは、献体登録イコール死の受容ではなく、あくまでも、いつか訪れる死後の自分の遺体の処理の在り方を決定しておくということであり、同時に現在の自分の在り方を見つめ直すということに他ならない。森居は、日本人の死生観の一端を明らかにする目的で、柳田邦男、岸本英夫、西川喜作、千葉敦子の4者の著書を分析している。その中で、「4者とも死を受容するためには、それに先立つ生が充実し、満足のいくものであることを条件としている。つまり、死を受け入れるためには、まず、生に意味があり、価値があることを求めている。」<sup>22)</sup>と述べている。これらは4者の死への受容過程を分析しての結果であるので、今回の献体登録者のインタビューから得られた結果内容とは直接重ならない。しかし、自分の死を見つめることで生を見つめ直すということにおいては共通するものがあると考えられる。

## V おわりに

今回、献体登録者10名に半構成的面接法を用いてインタビューを行った。その結果、献体登録者の登録に際しての認識のありかたに注目して、その意味を抽象化していくと、最終的に【死生観の成立とメンタルヘルスの確保、そしてボランティア精神と積極的な生への意志】としてまとめられた。

これらの結果は、先行研究の結果と重なる部分が多いということで、ある意味では手記の分析結果を検証することになったと思われる。

しかしながら、10名という献体登録者からの調査研究であり、しかも1回だけのインタビューであったので、登録者自身の深層にせまるという点に関しては不十分な印象が否めない。しかし、登録者自らの生の声をすくい上げての報告という点に関しては、調査の意義が見い出せたと考える。

## 謝 辞

研究にあたり、インタビューに応じていただきました、「くまもと白菊会」の会員みなさまに感謝申し上げます。また、会員の方へのインタビューに際し、相談にのっていただきました「くまもと白菊会」の会長濱津様、および事務局の橋本様に感謝申し上げます。

本研究は、平成13年度宮崎県学術振興財団の助成を受けた研究結果の一部である。

## 引用文献

- 1) 赤星誠：献体登録者の精神の健康についての一考察，宮崎県立看護大学紀要，Vol.1，No.2，73～78，2000.
- 2) 星野一正：わが国の献体，日本解剖学会，1984.
- 3) 前掲書1)：75
- 4) 星野一正：医療の倫理，161，岩波書店，2001.
- 5) 薄井坦子：科学的看護論，107，日本看護協会出版会，1997.
- 6) 南郷継正：武道講義入門，弁証法・認識論への道，118，三一書房，1994.
- 7) 広井良典：死生観を問い直す，10，ちくま新書，2001.
- 8) 前掲書7)：14
- 9) 前掲書1)：75
- 10) 前掲書1)：75
- 11) モリス・シュヴァルツ：松田銑訳，幸福な死のためのわたしの哲学，140，飛鳥新社，1997.
- 12) 池田知隆：日本人の死に方・考，257，実業之日本社，1998.
- 13) 前掲書1)：75
- 14) 前掲書1)：75
- 15) 前掲書1)：76
- 16) 前掲書1)：76
- 17) 前掲書1)：75
- 18) 前掲書1)：76
- 19) 前掲書1)：76
- 20) 前掲書1)：76
- 21) 金子郁容：ボランティアもうひとつの情報社会，2，岩波新書，2001.
- 22) 森居晶子：言説にみる日本人の死生観，人間科学論究，139，1999.

# A Study about the Change of Recognition of Body Donators

—— Through the Interview the Member of "Kumamoto Shiragikukai" ——

Makoto Akahoshi\*<sup>1</sup> Kaori Nakashima\*<sup>1</sup> Yuko Kawamoto\*<sup>2</sup> Koudou Kodama\*<sup>3</sup>

【Key Words】 Donator, A view of life and death, Recognition, Mental health, Volunteer

---

\*1 Makoto Akahoshi, Kaori Nakashima : Miyazaki Prefectural Nursing University

\*2 Yuko Kawamoto : Miyazaki Prefectural Miyazaki Hospital

\*3 Koudou Kodama : Kumamoto University